

心の科学を羅針盤とした未来社会像の構築

① ビジョンの概要

本提案では、人間の心に関する知見を、学問分野を越えて共有し利用する未来社会像を提案する。心の科学を羅針盤とし、また、心の科学を中心に人間に関するあらゆる研究分野をリフレームし有機的に連携させることにより、学術の振興を目指す。

② ビジョンの内容

現代社会の多くの問題は「こころ」の問題としてリフレーミングすることができる。例えば、現代社会の深刻な問題の一つである「分断」においては、分断されたもの同士が互いの論理を理解することが困難であり、また、社会構造や為政者の判断が分断された個人やグループに影響を及ぼす。多様性の推進に関しても、社会を構成する人々のこころに焦点をあてずに制度設計のみが変更されると、多様な考え方やライフスタイルを持つ人間同士が互いに認め合い向き合って生きる社会の実現は困難となり、さらなる分断を招きかねない。人類の永続的な進化に目を向け、分断あるいは極論すれば人類の滅亡を避けるためには、政策立案や社会実装、SDGs に表されるような持続可能な社会の実現に心の科学を取り入れる必要がある。

現在の学術研究においては、領域横断・分野融合の必要性が認識されてはいるが、研究のアウトプットや社会実装の段階では、その効果が現れているとは言い難い。情報や技術の増加に伴い、個人の研究者が専門性を高めつつ領域横断型の質の高い研究を行うことも困難を増している。本申請で提案する「ビジョン」は、各分野の専門家がそれぞれの専門性を極める中で、「心の科学」の価値を共有し、分野を越えて社会問題の解決につながる可能性をもつ基礎・応用研究に取り組み、研究成果の共有や社会設計・技術開発が行われるという未来の形である。

③ 学術研究構想の名称

心の科学を羅針盤とした未来社会像の構築

④ 学術研究構想の概要

本構想は、(1)学術研究の体制と(2)人材育成の2つを柱とする。

まず(1)として、様々な学術研究や社会問題を心の科学に基づいて分析しリフレームする。そして、学術推進や社会問題解決に向けて、こころのデータを集約し利用するための分野融合的体制を構築する。既存の分野を横断的に繋ぐことにとどまらず、学術的問いや社会課題を人の「こころ」という視点から分析し、こころの問題として捉え直しそれに沿ったデータ取得や活用方法を提供することを通して、研究や問題解決へのアプローチの次元を増やすリフレーミングを提案する。

(2)では、「こころ」の視点と高い専門性を併せ持つことで、高い視座を持ち産学官民で活躍する人材を育成するための制度を構築する。今後の学術を担う人材の育成において、既存の領域の枠組みを越えた視座を持ち、社会に生きる人々のこころの問題を認識したうえで社会に貢献できる専門家の育成が急務である。日本国内の多くの大学では、心の科学を扱う講義や実習が個別の学部・研究科単位に散在しているため、心の科学に直接的に関連する内容であっても提供される教育が限定的である。そこから、分野を限定せずにさまざまな専門分野を学ぶ学部学生・大学院生に、それぞれの専門分野における人の心の科学的検証を学ぶ仕組みが必要となる。本提案では、分野・大学の枠をこえた心の科学教育の仕組みを提案する。

本提案は、特定の大学や研究者への大型予算の集中という形ではなく、多様な分野の多様な研究が、直接的または間接的に社会や学術に貢献できる心の科学研究の在り方を構築する重要性を訴えるものである。

⑤ 学術的な意義

本申請で提案するビジョンは、学術的問いや社会課題を人間の「こころ」という視点から分析し、こころの問題として捉え直し（リフレームし）、それに沿ったデータ取得や活用方法を提供するものである。

人間に関するデータを個別の研究で測定して報告するのではなく、動的で多次元的な人間のデータを大規模に測定し、利用可能な形で世界に公開する仕組みを構築する。

提案の背景には、技術開発、法、経済、社会に関する各領域の学術研究と、人を対象とする心の科学が、必ずしも有機的かつ効率的に連携できていないという問題がある。既存の学問領域を横断的に繋げるという試みが続いているが、情報や技術の増加に伴い、個人の研究者が専門性を高めつつ領域横断型の真に質の高い

研究を行うことも困難になりつつある。人間の心や行動のデータ取得には、正しい指標の選択、測定技術、条件設定、個人データ保護に対する配慮など、学術的に確立された方法論に基づく必要もある。そこで、既存の枠組みを脱却して、人間の心という視点で問題をリフレーミングすることで、あるべき領域融合の形を目指す。

また、多くの心理学・神経科学研究で取得された人の心に関するデータの共有は各研究者の判断に任せられているという現状がある。集約されれば大きな価値を持ちうる研究であっても、実験計画、参加者属性、データの性質が統一的なものでないため、データ活用は困難である。しかし、一部の研究グループに資源を集中しても、基礎研究の土台はもろくなる一方で、多様な研究が展開することには繋がらない。そこで、国内の多様な研究者が透明性のある研究計画を立て、データ共有によりインセンティブが得られる仕組みの構築の実現を目指す。

学術研究のリフレーミングと共に、大学・大学院の教育プログラムの連携を推進することで、分野を超えて心の科学を理解する人材の育成も目指す。本申請が提案する教育システムにより、各分野の専門教育を受ける学部生・大学院生が、それぞれの専門分野の課題を「こころ」の観点から考え、その「こころの問題」を他分野と連携して解決に導くことが可能となるであろう。産・官・民で活躍している人材のリカレント教育の場としても活用できる。本申請の提案は、教育プログラムの新規立ち上げを目指すものではなく、「こころ」という視点から、既存の教育制度を大きく変えずにリフレーミングすることによって学修者の視野を広げるものである。運営のために研究者・大学教職員の負担が増え、昨今指摘されている日本の研究力の低下を加速させてしまわないよう、慎重に計画・運営することで、研究力を持続的に高めうる次世代の人材を育成することが可能となる。

⑥ 国内外の研究動向と当該構想の位置付け

神経科学分野では、人工知能に利用可能な 73,000 の自然画像に対する人間の脳活動を高解像度で撮像したデータが公開されるなど、人工知能への応用を考慮に入れたデータシェアリングが進んでいる。また、人工知能が下す道徳的判断に関して、オンライン実験プラットフォーム「モラルマシン」の実験により、道徳的判断に個人差や文化間の倫理的差異が反映されることが報告されている。さらに、米国国防高等研究計画局 (DARPA) は、人間の専門家と協調した意思決定アルゴリズムの開発を開始するなど、正しい答えが存在しない困難な領域において、「こころ」と人工知能アルゴリズムの整合性を定量化する流れが始まっている。国内では、理化学研究所の生命科学データ共有開発ユニットや JST のバイオサイエンスデータベースセンター (NBDC)、AMED による医学研究推進のためのデータシェアリングなどが稼働しているが、社会に生きる人間の心に関する国レベルでの包括的研究やデータシェアリングは進んでいない。

⑦ 社会的価値

地球温暖化問題に関する世代間公正性、社会の分断、多様性と包括性の理解、少子化、不登校、引きこもり、感染症対策と活動規制のジレンマ、SNS における誹謗中傷、格差社会、災害対策など、現代社会が抱える問題には、須くこころの問題が関係している。社会に生きる人間のこころに関する幅広いデータを集約し、人工知能への応用もふまえて利用可能な状態で共有することは、知的価値、経済的・産業的価値に直結する。また、経済や産業が発展した未来社会で、心の科学の素養を持つ人材の産学官での活躍することにより、人間の幸福を蔑ろにしない社会の実現を目指すことができる。

⑧ 実施計画等について

実施計画・スケジュール

1～3年目：[学術] 社会問題のリフレーミング、必要とする「こころのデータ」のリスト作成。[人材育成] 心の科学横断教育プログラム構想、立ち上げ、リカレントプログラム開始。

4～6年目：[学術] 研究推進、データの公開、産学官民の連携。[人材育成] 心の科学横断教育プログラム修了者輩出。

7～10年目：[学術] 社会実装。[人材育成] 産学官民での活躍、心の科学に基づいた社会設計。

総経費 具体的な研究計画の提案ではないため、実施体制や経費は提案しない。

⑨ 連絡先

四本 裕子（心理学・教育学委員会心の研究将来構想分科会、東京大学大学院総合文化研究科）